

氏 名 宋 丹丹 SONG DANDAN

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 2439 号

学位授与の日付 2023 年 9 月 28 日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 身体と心性の視点からみた岩石伝承——通過儀礼を中心に

論文審査委員 主 査 山田 奨治
国際日本研究コース 教授
安井 眞奈美
国際日本研究コース 教授
榎本 涉
国際日本研究コース 教授
小池 淳一
日本歴史研究コース 教授
鈴木 由利子
宮城学院女子大学 学芸学部 非常勤講師

博士論文の要旨

氏名：宋 丹丹 SONG DANDAN

論文題目：身体と心性の視点からみた岩石伝承——通過儀礼を中心に

本論文は身体と心性の視点から、岩石を用いた通過儀礼をはじめ、岩石にかかわる習俗や信仰などの考察を通して、岩石信仰の特徴を民俗学の方法論で分析し、岩石と人との関わりを解明するものである。

人間は自然に取り囲まれて生活している。そして、五感を通して自然を認識し、利用して生きてきた。また、山や川、森などの自然環境から人々の生業や信仰などが培われてきた。岩石は、動物や植物と並んで自然の主要な構成要素の一つであり、人々の営みによって日常生活のなかに取り入れられ、現在まで伝承されてきた。なかでも、人の誕生から死までの各段階に行われる通過儀礼には、岩石が用いられる場合が多い。例えば安産の鎮懐石、病氣平癒の岩神、死者の枕としての枕石などである。

岩石信仰に関する研究は、民俗学をはじめ、宗教学、考古学、歴史学など多様な分野から行われてきた。しかし、岩石がいかに人々の生活の中に取り入れられてきたのかについての研究は、あまりなされてこなかった。そのため本論文では、岩石信仰に関する先行研究をもとに、岩石を用いた通過儀礼に注目し、身体と心性の視点から岩石の意味づけ、特徴やその信仰を明らかにする。それを通して、岩石と人間の関係性を考察することを目的とする。なお身体と心性の視点は、小松和彦がよりリアルな民俗社会を描き出すため、感性とそれによって引き起こされる生理に身を寄せて、身体と心性の関係に注目して構築を試みた「感性の民俗学」に依拠している。

本論文は序章、本文七章、終章から構成される。

序章では、岩石信仰の特徴を分析し、岩石と人との関係を解明するという本論の目的のために、身体と心性を含む研究方法を紹介したうえで、本論文の構成を示した。

第一章では、民俗学を中心に地質学、環境民俗学などの先行研究も視野に入れ、岩石と人間のかかわりに関する研究を幅広くまとめた。従来の研究では、岩石信仰や岩石の伝承、他の信仰・習俗との習合などに重点が置かれたため、岩石と通過儀礼についての研究は少なかった。また、本研究のように「岩石に腰掛ける」、「岩石を撫でる」など、岩石に対する人々の身体行為に注目して分析する研究はほとんど見られなかった点を指摘した。

第二章では、近代における全国の産育習俗を集めた『日本産育習俗資料集成』をもとに、岩石を用いた産育儀礼の290件に及ぶ事例を分析し、岩石の形態や岩石に加えた身体行為に注目して、産育儀礼と岩石との関係を分析した。とくに従来の研究では子授け、安産、子どもの成長など、無事に生まれ育つことを前提として分析する傾向が強かった。これに対して本章では、安産祈願だけではなく、避妊、墮胎と間引きの習俗にも注目して分析を行った。産育儀礼のなかで用いられた岩石は、安産を願うほかに、避妊や間引きにも用いられていたことを具体的に明らかにした。これによって、岩石に託された「産む」ことを願う民俗の心性だけでなく、「産まない」ことを願う民俗の心性にも迫ることができたと言

える。

第三章では、文化庁編『日本民俗地図 7 葬制・墓制』と国立歴史民俗博物館編『死・葬送・墓制資料集成』（東日本編・西日本編）に所収された事例のなかから岩石を用いた葬送儀礼を取り上げ、その特徴、働き、そして岩石への信仰を分析した。特に、明治政府の法令や高度経済成長期などの社会変化のなかで、岩石を用いた習俗が変容したことを明らかにした。また、人々にとって最も重要な生と死に関する儀礼のなかで、岩石は長らく用いられてきたことを指摘し、とくに身体行為を伴いながら岩石に祈願するという特徴を指摘した。

第四章では、岩石をいかに日常生活のなかに取り入れたのかを明らかにするために、病氣平癒のなかで用いられた岩石や、岩石に触れたら病気になる禁忌など、病にまつわる習俗を検討した。病氣平癒を祈願する際に、川原石、穴あき石など特別な石を用いた特徴が明らかとなった。また、岩石で撫でる、擦るなどの身体行為によって病氣平癒を祈願することに対して、触ると病気になる岩石伝承も視野に入れ、身体行為と岩石の呪術性を関連づけた。

第五章では、まず第1節にて伝説における岩石について分析し、とくに夜泣き石、血の出る石、話す石など、岩石と身体の関係性に注目した。また第2節では、身体と心性の視点から岩石に聖性が発生する理由を検討した。これまでの研究の焦点は岩石そのものや、岩石の置かれる場所など「もの（形）」と「場（空間）」にあり、人間の行為はあまり注目されてこなかったと言える。しかし本節で論じたように、岩石に祈願する際、岩石を撫でる、跨ぐ、積むなどの行為を伴うことによって、岩石に宿る力を促す、または顕在化させることができることとみなされていたことが明らかとなった。

第六章では、境界における妖怪・怪異と岩石の関わりを論じた。とくに女性が岩石となった化石伝説を中心に、岩石に生じる怪異を論じることによって、岩石の境界性を明らかにした。

第七章では、身体と心性の視点から中国の岩石信仰を紹介した。中国は多民族であるため、岩石信仰の形態は多様である。そのなかで、人々が身体行為を加えて岩石を信仰していた点などを指摘した。

終章では、各章で明らかにした点をまとめ、全体の結論と今後の展望を提示した。結論は以下の三点になる。第一点は、通過儀礼において、岩石が重要な役割を果たしていた点である。本研究で考察したように、子授け祈願から、出産・育児の儀礼、死をめぐる儀礼といった、人の一生の重要な節目において岩石が用いられていたことを明らかにした。時代の変化によって岩石を用いた儀礼は次第に行われなくなってきたが、現代まで見られる儀礼や、新しく作られた儀礼もある。このように、通過儀礼において岩石は欠かすことができない存在であり、岩石への祈願や信仰などは人々の生活のなかで絶えることなく続いてきたことが指摘できる。通過儀礼という一生の重要な節目で岩石を用いたのは、岩石の境界的な性格を利用したからではないかと考えられる。つまり、岩石を用いることによって時間や空間に区切りをつけたのだと理解できる。

第二点は、岩石信仰において、岩石の特徴的な外見や、河辺などにあるという、もと置かれていた場所が重視されるという点である。本論の考察を通して、色、形などの形態に特色のある石が通過儀礼のなかで用いられていたことが明らかとなった。たとえば、産飯

の際に用いられた小石は、多くの地域ではその形が丸ければ丸いほどよいと考えていた。また河原石を用いた儀礼や習俗も数多くみられる。このように、岩石の外見や置かれていた場所を重視することは、岩石信仰の特徴の一つと言える。

第三点は、岩石の儀礼や岩石の習俗を人々が身体行為を加えて行っていた点である。従来の研究では、岩石が信仰対象となった二つの要因として、一つは岩石そのものが霊力を持つこと、一つは神の依り代とされたことを挙げている。それに加えて、本論文の考察を通して、人間が岩石に身体行為を加えることも、岩石にやどる力を促す、または顕在化させる条件の一つであることを指摘することができた。また通過儀礼の分析から、人間が岩石をいかに生活の中に取り入れてきたかも、明らかにした。

今後の課題として、本論をもとに、中国の岩石信仰と通過儀礼を視野に入れ、日中の比較研究を進めていく予定である。そして、日中両国ひいては東アジアの岩石信仰についてさらに研究を進めることによって、より深く人間と岩石との関わりを考察していきたい。

Results of the doctoral thesis defense

博士論文審査結果

Name in Full
氏名 宋丹丹 SONG DANDAN

Title
論文題目 身体と心性の視点からみた岩石伝承——通過儀礼を中心に

本論文は、通過儀礼を中心とした岩石に関する膨大な伝承の分析を通して、自然と人間の関わりを、身体と心性という独自の視点から解明しようとした研究である。

本論は序章、第一章から第七章、終章より構成されている。序章では、自然と人間の関係を明らかにするため、岩石を用いた通過儀礼や習俗、信仰などを分析する方法論が示される。各章では、「通過儀礼と岩石」に産育儀礼（第二章）と葬送儀礼（第三章）を取り上げ、「日常生活と岩石」では病気の習俗（第四章）と身体（第五章）を、「境界と岩石」では怪異・妖怪（第六章）を対象として分析を行い、最後に第七章にて中国の岩石信仰と通過儀礼を紹介し、終章で結論と今後の展望を述べている。

第一章では、岩石と人間の関わりについて先行研究を整理している。民俗学の枠を超えて、地質学、環境民俗学を視野に入れて幅広く分析し、あわせて通過儀礼の研究を民俗学に特化して概観し、基本的な視点を打ち出している。

第二章では、通過儀礼と岩石の関係を、産育儀礼を中心に論じている。『日本産育習俗資料集成』の膨大な事例を基にして、岩石を用いた産育儀礼と習俗を概観し、その特徴を小石や丸い石などの形に注目して分析している。とくに、従来の民俗学では安産祈願を中心に論じる傾向にあったが、産むことだけではなく、避妊、墮胎、マビキ等の受胎および出生コントロールにも注目して、岩石との関係を明らかにした点は重要である。

第三章では、葬送儀礼を扱い、岩石がいかに用いられたのかについて、文化庁編『日本民俗地図』と国立歴史民俗博物館編『死・葬送・墓制資料集成』（東日本編・西日本編）を基に、近現代の儀礼と習俗の変遷を辿りながら明らかにしている。葬送儀礼の中で、岩石を用いる際に、「投げる」「積む」といった身体行為を伴う点に着目した。

第四章では、病気に関する儀礼や習俗と岩石との関わりを分析する。病気を治す俗信だけでなく、触ると病気にかかると伝えられる岩石の俗信にも注目し、そこに見られる身体所作の検討を行っている。

第五章では、さらに身体所作と岩石との関わりを、伝説を切り口に論じている。『日本伝説大系』（全15巻）と『日本の伝説』（全50巻）に掲げられた膨大な事例から、岩石に関わる事例を抽出し、特徴に応じて分類するとともに、「しゃべり石」や「夜泣き石」といった話す岩石、泣く岩石、また成長する岩石など、身体に関する岩石伝説の特徴を分析する。また産育儀礼や葬送儀礼に用いられる岩石は、そのまま用いられるだけでなく、「撫でる」「跨ぐ」「積む」といった身体的な働きかけを介在させることによって、聖性が生じることを明らかにした。本書でもっとも著者の独自性が発揮された章と言える。

第六章では、怪異・妖怪に関する伝承にみられる多様な岩石を、境界性に注目して分析している。石に化けるといふ化石伝説を人間、動植物、道具に分け、その意味を考察した。

第七章では、これまで論じてきた日本の岩石伝承を相対化し、比較研究に繋げていくた

めに、中国における岩石に関わる伝承と儀礼を概観している。

終章では結論として、岩石が通過儀礼において重要な役割を果たしており、また岩石信仰においては岩石の特徴的な外見や、置かれた場所が重要で、さらに人間の身体行為が加わることで聖性が発動するといった点を指摘している。そして、日本における岩石信仰と中国の岩石信仰の類似点および相違点を指摘し、中国における漢民族と少数民族の岩石信仰は大きく異なるという特徴を踏まえた上で、今後、東アジアにおける岩石信仰の研究へと広げていく展望を記している。

上記のような本論文を評価すべき点は、以下の通りである。

第一に『日本産育習俗資料集成』、『日本民俗地図』、『死・葬送・墓制資料集成』、『日本伝説大系』、『日本の伝説』などの大部の資料集成をもとに、多量の事例を包括的に整理、分析することで、岩石に特化して自然と人間の関わり合いを明らかにした点である。これまで民俗学が事例の蓄積に注力してきた中で、民俗研究を新たな段階に押し上げる意欲的な研究として評価できる。

第二に、身体と心性に注目して岩石に関する通過儀礼や伝承を分析するという方法論を取り入れて、法則性を見出そうとした点である。このことは、岩石の民俗的利用の諸相を整理しただけではなく、通過儀礼の研究に身体性が重要である、という見解を付け加えることとなった。また、儀礼や習俗に用いられる岩石が聖性を帯びるという点について、これまでの民俗学では岩石に宿るタマ、魂の問題として論じてきたが、「撫でる」「触る」といった身体行為との関わりを明らかにしたことは、本研究の独自の成果と言える。

第三に、岩石をもとに自然と人間との関わりを明らかにするという主題の民俗研究を貫いたことにより、民俗学に留まらない、人文学と自然科学を融合させる学際的な研究となり、今後の展開が大いに期待できる点である。また中国の事例研究を加えて、東アジア全体の岩石伝説、岩石信仰の解明というより広範囲の研究が準備されている点も同様である。

このように独自の視点と成果を数多く含む研究ではあるが、一方で不十分な点と課題とすべき点も少なくはない。以下、指摘しておく。

第一に、本論にて先行研究は列挙されているが、必ずしも批判的に検討されているわけではなく、またその後の事例分析にも活かされていない点が挙げられる。また第二に、分析する資料の詳細について、時代や地域等の説明が充分になされておらず、資料の特徴が明確にされていない点、第三に、大部な事例の分析を通して「日本」の岩石伝承の特徴を抽出するという方法論を採用した意義と限界について、必ずしも充分には論じていない点、第四に、事例の分析が地域性を視野に入れた考察につながらずに終わっている点が挙げられる。また本人による現地調査の成果が部分的に挿入されているが、事例分析として各章の議論につながっていない点も指摘できる。しかし、この点についてはコロナ禍でほぼ三年間にわたり十分なフィールドワークを実施できなかった状況を加味する必要がある。第三と第四の課題は関連しており、地域性を視野に入れ、フィールドワークを継続することで克服しうると言える。

このようないくつかの課題が見出せるものの、本論文が岩石を素材にして、誕生から死に至るまでの通過儀礼を通して、人間と自然の関わり方を明らかにした重要な研究であることは確かである。したがって、審査員の全員一致で、本論文は学位を授与するにふさわしいものと判断した。